

ぼくたち野球少年



涼一

ぼくたち野球少年

「ぼくのおとうと」

ぷきちゃんの食べるぼんぼん、20円。

学校の帰りに売れないプラモデル屋さんに行って買うのだった。

前は、10円だったのに。何で値上がりしたんだ。同時にアイガーというブラックモンブランのパクリが、はだら、という駄菓子屋に売っていた。あたりつきで時々奥を探るとあたっていた。そこでペプシコーラを飲んでいた。

ぷきちゃんは学校をかえっていった。

ぷきちゃんに小さい頃何になりたいか聞いた。

「お父さんみたいな医者か、科学者。」

そうだったので、母さんの使っていた電卓を持ってきて、

「いい？一足す一は二」

「なんそれ？」

「科学者になるんだったら、算数はいるってお父さんがいったよ。医者も。」

「算数っちなーん？」

「大きくなったら数学っちいうらしい。」

「わからん。」

ぼくは、ちょうどいい絵本があったので、ぷきちゃんに見せた。

その絵本はトラックが来て、すうじをかぞえるだけのえほんだった。

「トラックが二台きました。中には十箱リンゴの入った箱があります。箱の中には50個りんごがはいっています。りんごはぜんぶでなんこあるでしょう。」

「うーんわからん。」

そこで電卓を取り出してかけ算をした。「1000個」

「どうやってしたん？源一兄ちゃん。」

「僕は今かけ算を覚えとる。だから計算できた。かけ算の前に足し算が重要。しょうばいをするひとはみんなしているよ。」

「へーえ。」

幼稚園にあがったばかりの弟は僕より先にかけ算の2の段を覚えだした。

「なんで、ぷきちゃんいえるん？」

「源一兄ちゃんとお父さんが算数は暗記っちいいよっただけ、たしざんも覚えた。」

「電卓で？」

「そう、あと母さんのレシートのおつり計算できるばい。」「暗算でできるよ。」

「なんか！？引き算もできるようになったんか。」「あー小学校にはよならんかな。」

自慢げに弟がいった。弟は国語が苦手だった。小学校に上がるときは国語で0点とるのに算数では100点とってくる。いつも算数は100点。「いちにのさんすうでおしえてくれるけ。」

NHKのその番組は僕にとってイライラしたが、弟にとっては至福のときだった。

僕は国語で100点取っていた。逆だった。

思えばこれが弟がNECの子会社にはいつきっかけになった。

つづく

「プロ野球をはじめて見た日」

小学校から帰ったらトムとジェリーを見て大江戸捜査網科か遠山の金さんみて相撲見て8時になったら寝るとというのが

僕たちの習慣だった。後で8時だよ全員集合というのが見れるようになる。

ところが、あるとき、プロ野球という存在を知った。テレビであってるのに、僕たちは見ていない。

なぜだろう。

8時になるのを我慢して起きていた。そうすると、巨人のプロ野球中継が始まった。相手は阪神だった。

異様な熱気。興奮。何が始まるんだと思っていた。

つつつつつ。

ガチャガチャ。

お父さんがチャンネルを変えた。

NHKの物理の先生が出ている。

陽一兄ちゃんを変えた。

ガチャガチャ

「いいやん、プロ野球ぐらい。王さんがでとるんばい。」

「王さんちなん？」僕が聞いた。

「すげーひとたい。めったにでらん。ホームラン王たい。」

「これが王さん。」打席に立ってその人は片足をあげてバットを振った。空振りだった。

今度見ていると、ヒットを打った。

「これがヒットたい。ホームランはたまたまで出らんかったけど。」

「いつまで見よるんか！はよ、源一ものぶあきも、ねらんか！」

ガチャガチャ

といってまた、NHKの物理の番組になるのだった。

ぼくは、物理がこの日大っ嫌いになった。

つづく

「赤のプラスチックバット」

プラスチックバットと庭球をこっそり買ってきた。

直方の丸色でうっていた。

なぜかお母さんはすんなり買ってくれた。

ほかのものはだめでもすんなり買ってくれた。

お母さんは家に嫁いでナイターを滅多にみることができなかった。

お父さんのせいだ。

なぜプラスチックバットと庭球を買ったかという公園でみんな遊んでるからだ。練習してから、

そしてみんなに披露しよう。

といってもどうかまえていいかわからない。

陽一兄ちゃんを呼んで習った。

まずバットは肩におくか体の前にたてる。

足は肩幅よりちょっと開いてピッチャーの方を見る。

王さんみたいに片足でするのは合理的だけど足をあげるつもりで体重を後ろから前にやる。

「できん。」

「じゃあ、王さんのまねして見ろ。」

「できた。」

「王さんは左利き。おまえは右利き。やから、足を左をあげる。」

そしてバットを振る。だんだんうまくなったら足を上げんで体重を後ろから前にやる。

そしてバットをピッチャーの方に振る。

「できた。」「今度は玉の打ち方。いーか？陽一兄ちゃんのボールが手にあるときからみよけよ。絶対、目をはなすなよ。」球が飛んできた。「で、たまが、こうーゆっくりきて、真ん中に来たときど真ん中に来たとき、ふってごらん。」球が当たった。

「わーい。ホームラン王だ。」

「ホームランは違う」今のはヒット。「大切なのはバットの芯であてること。」「それとスナップ。てくびのかえし。」

「ホームランはウルトラマンぐらいのたかさを飛ばさな入らん。」

「あーそうなん。難しいね。」

「ボールが真ん中に来るとは限らん。ここやったり変なところやったり。ボールやったり。」

「ボールっちなん？」

「うたんでいいたまのことたい。」「バットにあたる範囲はボールじゃない。そーじゃないとホームラン王にはなれん。」

「後は自分でボールを浮かしてそれを打っているなところにやってみて、そのボールを取りにいく。」

それからというもの、ぼくはトスバッティングをずっとやった。やってはボールを取りにいく。ボールがなくなるとはちかくの、駄菓子屋に買いにいく。

永遠と暗くなるまで学校から帰ってやった。

トムとジェリーも見なくなった。

弟に打ち方を教えた。

すぐ打てるようになったのでトスバッティングを教えた。

弟は熱心じゃなかった。

つづく

「打ちやーよ！」

ある日お母さんがジャイアンツの寝間着を買ってきた。

僕たち二人はそれを来て野球をした。

どっちも当てるのでどっちかが取りにいかなければならない。

圧倒的に打つ方がいい。

僕がピッチャーになって投げるときボールばかり投げてストライクといった。
それがもとで喧嘩になる事が多かった。
いよいよ公園でお披露目だ。さとしちゃんたちがいたので、かててもらおうとした。
双子の変な兄弟の兄貴の方がピッチャーだった。絶対打ってやろうと思った。
その兄貴の方は幼稚園から威張っていて滑り台をいつも占領していた。
なんかはがゆいやつだった。
アウトローに投げてくる。しかもボール。
ストライク。
みんないった。
また投げてくる。バットの範囲どころか、頭を通り越してしまった。
ストライク。
みんないった。
「ちゃんとなげれ。ばかが。」今度はヒットを打った。
「なんしょんか、走らんか。」
「へ？」
一塁に走るのもわからんでアウトになった。
みんなから笑われて絶対せんといってやめてしまった。
また家に帰ってトスバッティングを始めた。
ウルトラマンみたいに大きなの打ってやる。
こそっと、夜中、お父さんの目を盗んでテレビをつけた。「プロ野球珍プレー」というのがあっていた。
外人が出てる。アッパースイングというんだな。みんなホームランじゃん。
「すげー。」
そこに陽一兄ちゃんが来て野球のルールを教えた。
簡単だった。何だ。
そうだったんだ。
しばらくすると、具志堅の試合があるといってみんな見出した。パンチが見えないのに相手が倒れた。「何でボクシングのコマーシャル短いの?」「一分しか休めんけて。」
世の中にはすごい人がたくさんいるなあとと思った。
ボクシングのルールはあしたのジョーを見て知っていた。
だからこんな人にもなりたかった。
つづく

「近所の本屋さんとプロレスラー」

ぼくは近所の本屋さんについて「あしたのジョー大百科」「鉄道大百科」「帆船大百科」「ドラえもん大百科」をそろえた。特にドラえもんとかコロコロコミックは立ち読みしたり、買った。藤子不二雄は全部読んだ。立ち読みで。ときどき、本屋のおばちゃんが「源一ちゃん、買わんならかえって。」といわれるまでいた。その本屋さんのおいちゃんが若い頃甲子園にいったというのを知るのはだいぶ、あとになってから、わかる。
小学校の集団登校のときに待ってる間、田の道や正月という遊びをした。けんけん陣取りがいちばんおもしろかった。かんけりもした。牢やぶりもした。

時は移り変わり最初は巨人ファンだったが阪神ファンになり西武ファンになった。6年生になった。

塾に忙しく行かなければならないので学校は適当にやっていた。

プロレスブームが来てハルクホーガンとスタンハンセンとかブローザーブローディーとかキラーカーンとか

タイガージェットシーンとかミルマスカラス、ドスカラス、フィツフォンエリック、ボボブラジル、アンドレザジャイアント、タイガーマスク、ブラックタイガー、猪木、馬場、藤波。アニマル浜口、ラッシャー木村。みんな小学校でまねしだした。タイガーマスクの正体は、ぜったい、さやまさとるだ。とみんなでいった。

つづく

「僕たちのブーム」

最後はプロレスを帰り会でやんなさいという事になり僕がブッチャーをして相手もブッチャーをして地獄付きをおたがいにして、いたいということになった。「ハイ終わりもう、プロレスごっこはしないように。女子がいやがってるから。」

ということになった。キン消しがブームになった。ガチャガチャでやってぼくは駄菓子屋のところで50円入れて（ねえあがりしていた。なぜか。）ブラックホールとバッファローマンを手に入れた。うれしかった。

がっこうにいくと怪獣の消しゴムや車の消しゴムキン消し。が順番にブームになった。

怪獣の消しゴムを紙相撲みたいにして取り合う。

僕のゴモラは強かった。しかし全部取られてしまう。さとしちゃんがずるかった。ぼん、とやって勝った。と行ってとていく。さとしちゃんはその方法で、ネプチューンマンまでもっていた。きたねー。LSIゲームブームとゲームウォッチブームも来た。みんな夢中になった。いっちゃんが、転校するのでゲームウォッチのオクトパスをもらった。悲しかった。大事にしてたのに。僕はその思い出があってドンキーコングジュニアのゲームウォッチをいつまでもいつまでももっていた。今売ったらたかくなるだろうが、甥にやってしまった。

ちょうどそのころ、パソコンブームとゲームのブームが来た。その後にファミコンブームが来た。

アップル2を次男の兄ちゃんがかってやろうといっている。僕は富士通のFMNEW7がほしいといった。パソコンのモニターが欲しかっただけなのだ。パソコンでベーシックマガジンという雑誌を買って、ウルトラマンというプロレスのゲームを作った。RUNを押してみた。その通りになった。弟にいても信じないのでもう一回RUNを押した。ピーといってエラー音が出た。むなしかった。ロードランナーというゲームを買って永遠にゲームを作った。ハイドライドというゲームを買っていとこの武とのぶあきとやった。重要なところはぼくがやった。たとえば、魔女からフェアリーをとるところ。水をなくすところ。みんなで解いて充実した。ブラックオニキスもやった。武が天才的に解いたけどむなしい終わり方だった。ドラゴンスレーヤーというのを買いたくて買いたくてたまらなかったが、買えなかった。ハイドライド2を武が天才的に解き、ロードランナーの難しいゲームを作っていた。どちらも認定書が解いたらもらえるのだった。あるかな？あいつの家に。

付け足しだが、ブームは小さい頃からあった。ピンクレディーブーム。トランシーバー。スーパーカー。銀玉でっぼう。野球カード。超合金。マイクロマン。中学になってからキャプテ

ン翼。なめねこの免許証（にせものもあった。）と耳あて途中で先生にもってくんと言われたのもってこなかった。

つづく

「アップル」

今思えば、アップル2を買っとけばよかった。

アップルには5歳のときの京都旅行の思い出がある。

スティーブジョブズの若い頃にあったのだ。

ポンというゲームとガンマンが打ち合うゲームがあった。

優しい方の外人が何か話しかけている。ウォズニアック氏だろう。毛むくじゃらだった。

母がいった。Would you mind play with us?

ジョブズがああそうかわかった。片親か。という感じだった。ちがうのに。

そういえば、ジョブズ氏が「パパいない」ときいてきた。「ママと来てるんだ。」日本語が通じなかった。

そして、息をゲームに吹きかけてアップルコンピューターのロゴを書いた。横線を引いて「レインボー」

といった。

「ゴーゼロックス」

「ことけ」とかいていた。

伝記を後で読んだら、ウォズニアック氏とジョブズ氏だとわかった。

夜も昼も二人はゲームコーナーにいた。

ずっとしゃべっていた。

「何かの社長さんみたいね。」

母親がいったので、「社長、ゴーゼロックス。ばいばい。」

そう言って京都旅行は終わった。

人の出会いは不思議なものだ。

それから何回か偶然おおきくなってからも、旅行であった。きづかなかった。今思えばiPhoneとiPadのアイデアは僕の小学校5年生の塾通いのときにあった。もう自白するが塾から帰ったときにみどりの窓口を見たのだ。駅員さんがコンピュータを扱ってる。ひらめいた。頭の中に指で押すコンピュータを。しかも電話だったらどんなにいいだろう。そしてゲームもできてみんなとつながったら。人間の創造は具現化するものだ。いろいろアイデアを作っていた。そしてジョブズ氏の事を頭で考えた。あの人ならやってくれそうだ。あのにいちゃんなら。高校になる頃にはあの日とどうしてるだろうな。とっていた。ジョブズ氏がネクストに入った頃だった。世界で終わりのテレビでジョブズ氏にいった。訳が分かったようだ。髪を切れうっとうしいから。といった。そしてあの独特のスタイルになる。もう一人のコンピュータの父親だ。最初からつながっているひとつにいた。僕はこの頃しあわせだ。お金がないんだけどジョブズ氏の生き方を読んで感動した。そのとおりになった。

つづく

「ゲームに夢中」

話を元に戻そう、ゲームブームが来ていた。もう一つ駄菓子屋がはやっていて、不良のたまり場になっていた。お金をたかれるというので50円しか持っていかなかった。

僕もおそろおそろいった。

そうすると、そこでなんかにあたった。「ゆうれいがおるばい。」

それを聞いて幽霊騒動が起こって近所の不良が来なくなった。

ペンタとかスクランブルとかディグダグとかスパルタンXとか、くにおくん。マリオブラザーズにドンキーコング。ゼビウス、ドンキーコングジュニア。インベーダー、花札ゲーム、麻雀、ギャラクシアン。ルーレットゲーム。スーパーマリオはみんなが占領してたのでできなかった。10円で、好きなだけやった。猿のようだった。まだいっぱいあった。空手家というゲームをわざわざあるところまでやりにいった。一番手強かったのは井筒屋のおくじょうにある、ボスコニアンというゲームだった。シューティングゲームの集大成みたいだった。

ブームはそれに終わらなかった。

つづく

「ガンダム」

ガンプラブームが来た。

ザクが欲しくて欲しくてしょうがなかった。しかもシャーザク。グフも欲しかった。

並んだのに買えなかった。

ブームがすぎて全部そろえきれなかったけど、中学生になる頃は爆竹で壊してしまった。

買う前はガンプラが手に入らなかったので厚紙でガンプラを作った。マジックで塗った。

シャーザクやらゲルググやら似ても似つかなかった。それを見かねた親父がプラモデル買って

もいいぞとってくれた。紙で作ったのはたくさんあったけど燃やしてしまった。その前にチョコQブームが来た。ゼロヨンQ太という漫画を見て厚紙でスタート台を作った。コルベット、

ポルシェ、ワーゲン覚えてないけどにせものもあった。自転車油をねじに注ぐと速く走った。

つづく

「こんな親父いやだ。」

兄弟の中で唯一小さい頃から野球が許されたのは姉貴の栄子である。

剣道をしながら野球もやっていた。そして剣道を取るか野球を取るかで親父からいわれていた。

親父は姉貴のバットとグローブと軟球のボールをナイフで切り刻んで火にくべて「おまえたちもこうなりたくなかったら剣道をせ。」といわれた。轟々と火はたぎった。そして、姉貴を防具に着替えさせ自分も着替えてかかりげいこをするのだった。

剣道は小学校一年からやっていたうちの兄弟はもう一人の姉をのぞいてみんなやっていた。どんと踏み込んでやるもんだから、4年生のときに足の関節を外してやめてしまった。こんな親父に逆らったら死ぬ。そう思った。

つづく

「生涯のなかよし」

テレビを見ていると日本シリーズがあっていた。西武ライオンズが優勝しそうである。工藤が投げている。テリーも石毛も東尾も秋山も太田も渡辺も嬉しそうである。あの清原が泣いている。高校野球で怪物君と呼ばれた奴が。後一球、・・・勝った＝！

嬉しそうにみんな抱き合ってる。

小学校のテレビを先生が特別に見せてくれた。

ここでは甲子園の事はいうまい。そういうはなしじゃないから。でもよかった。今度から、正式に高校の指導者にプロの人が入ってもいいという法律ができた。甲子園はNHKなのでお父さんは見せてくれた。

ぼくも、あんましきらいな、野球をしなければならなかった。

年一回のソフトボール大会である。

小学校の思い出になる。そう思った。

練習でさとしちゃんのたまを打てと本屋の大将がいった。

そんな、近所一のさとしちゃんのたまうてるわけじゃないじゃん。

まあちいさいころのうらみもあるし、絶対打ってやろう。

そしたら簡単に打てた。センターごえ。

ウルトラマンみたいな打球を打てた。

しかし僕はまっすぐにしか打てなかった。「今度は上から本気で投げてきて。」聡ちゃんが怒って投げた。

ピッチャー返し、さとしちゃんにあたった。「もう一回投げてうえから、今度はセンターに飛ばす。」

センターに高々とあがった。その日から、さとしちゃんは僕を認めるようになった。さとしちゃんと大の仲良しになった。

さとしちゃんの打席を見た。インコースを引っ張った。

とぶ。

あーなるほど。ながせないけど、引っ張る事はできる。

守りはショートを任せられた。練習するけどセカンドが着くとかいうのがわからない。

ライトにまわされた。

打順は8番目だった。

練習試合で何でも打った。でもせいぜい2塁までが限界だった。足が遅かったから。

急に本屋の大将がいった。「源一ちゃんはミートがうまいから4番にする。ちょうどいいところで打つから。」

くる日もくる日もライトの練習をした。とれるようになった。

つづく

「決戦当日」

そして本番、相手チームはさとしちゃんのはいっている、野球チームの奴がピッチャーだ、これは手ごわい。

でもいつもどおりしていたら打てた。一塁だ。しかし、なぜか、ライトでトンネルをしてしまった。今度は打つ、センターに汚名返上のヒットをうった。守りもライトで取って一塁でアウトにした。剣道で鍛えたかただった。

見方の援護射撃で僕もぼこぼこに打ってその試合は勝った。

もうわすれたけど、準決勝で緊張した。二死満塁のときに僕の打順に来た。打てば逆転。タイムを取り（タイムの仕方は聞いていた。）バットを長くもって短く持ち直す作戦を自分で考えた。本屋の大将がなんかサインを送っている。サインを忘れてしまった。また、タイム聞きにいった。「源一ちゃん打てっちことよ。とにかく。」が、失敗した。ファールチップ。今度は真ん中をもってサードに引っ張った。「フェアーフエアー」みんなが、まわれ、まわれとうでをふっている。僕はサードを回りホームを踏んだ。ランニングホームランだった。玉はおそく帰ってきた。勝った。つづく

「決勝戦と優勝とばけもん」

今度は決勝だ。

決勝はバットが重くなっていた。打てなかったので沢井に変わってもらった。

沢井は僕の親友で中学もバレーボールで一緒だった。高校も一緒だった。

それだけしんらいしてたから、沢井に行った。「いっぱつかましてやれ、だいこんうち、ずっとままこだったことおもいだせ。」

沢井はホームランを打った。勝った。本屋の大將をみんなで胴上げした。

優勝して。ぼくたちは北九州の西部の地区の代表として出る事になった。

僕がまた4番でバットが重いのでやめたくなった。みんな期待している。

相手はアウトローを投げてくる。打てない。バットが重い。（ホークスの小久保選手がこれのうちかたがうまかった。）

相手のチームのホームランバッターというのがばけもんだった。

向こう側で試合があっているホームベースまで球を飛ばしたのだ。結果惨敗。相手チームが優勝した。

後で高校になってそのチームにいたという奴にあった。そのアルバムを見せてくれた。集合写真で

僕はしかめっ面をしている。負けて悔しそうである。

あのホームランバッターはプロにいったとか行かないとか。

野球少年を見るたびに昔の楽しかった事をすべて思い出すのだった。

余談苦しい事があったらYouTubeで武ちゃんマン7をみれ。便所で変身する。やくざに困ったら解決ズバットを見れ。ズバットが解決する。悪魔に困ったらレインボーマンを見れ。レインボーマンが解決する。もっとふるいのみたかったら、仮面の忍者赤影をみれ。もっとふるいのなったら、月光仮面の幽霊島からの脱出を見れ。すべて解決する。戦争に困ったらイデオンをみて二度と戦争は起こすまいと思いなさい。世の中の時事に困ったら、特捜最前線を見て勉強しなさい。基本がある。

おしまい。

奥付

ぼくたち野球少年

<http://p.booklog.jp/book/65116>

著者：涼一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maruchansakana/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65116>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65116>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ